

## 「おくのほそ道」再見

—— 日光から白河まで —— (その二)

横 山 邦 治

### 一

○とかくして越行こえゆくまゝに、あぶくま川がはを渡る。左に会津根あひづね高く、右に岩城いはき・相馬さうま・三春みはるの庄、常陸ひたち・下野しもつけの地をさかひて山つらなる。

白河の関を探訪した芭蕉主従は、白河城下を通って須賀川の等窮を尋ねる、その途次が前掲のごとき文章となっているのである。

この芭蕉主従の行程を、曾良の随行日記で確認してみると、旧暦四月廿一日、「二所ノ関」の名ある関の明神に参詣、それが今の白河神社のあるところかどうかは存疑として、今の旗宿の近在であることは確か、その明神参詣を終って「ソレヨリ戻リテ関山へ参詣」となる。「戻リテ」という表現は、旗宿の宿から関の明神へ「町々西ノ方」という表現で示されている。〕に行った道を、また引き返した

というのであろう、そして「白坂ノ町ノ入口」より山越えして出てきたあたり、雲桜碑のあるあたりから右へ切れて、今の表郷村の柳橋、内松などという集落を経て関山に参詣したわけであろう。満願寺のある関山は、標高六百十八・五米で、おだやかな稜線を持つ山である。

「旗ノ宿ノ峯迄一里半、麓ヨリ峯迄十八丁」の道を歩いて「成就山満願寺」を拝し、その後で「コレヨリ白河へ屯里半余」という、この道がどういう道筋であったのか、街道へ出て歩くと一里半という距離では白河に着かない感じであるので、満願寺から直線距離で二枚橋、上ノ原などという集落を経る間道を白河に向ったのかと思われる。いずれにせよ、白河の中町で所用をすませた芭蕉主従は、「矢吹へ申ノ上尅ニ着、宿カル。白河々四里」ということになる。この道は、今の旧陸羽街道を歩いたのであるうと思われる、今で言えば中町から小峰城跡の東側を本町・横町・

田町と通って阿武隈川を渡って女石・萱根・泉田の集落を経ながら矢吹の宿に向ったのである。

“とかくして越行こえゆくまゝに”というのは、あれこれと出発時からの一つの目的であった白河の関をめぐって右往左往し、何とか昔日の白河の関の峠を偲び得た思いを抱きながら、通り過ぎたことを表現した文章、次いで阿武隈川を“渡る”と言う、これは白河城下を流れる阿武隈川を指しているはずであって、旧陸羽街道に横たわる川であつたろう。

その阿武隈川を芭蕉主従はどのようにして“渡る”という行為をしたのであろうか、というのが私の前々からの疑問であつた。川を渡ると言う行為には、近世という時代においては多様な方法があつたこと、栗橋の関所での利根川渡りの一法について教えられた時に、改めて気付いたことである。架橋技術が今ほど進歩していなくて、その上封建社会における戦術的観点から必ずしも架橋を第一義としなかった近世においては、大井川の渡河方式も含めて、架橋から舟渡しに至るまで多様であつたのである。

阿武隈川は、奥羽における最上川と双壁をなす大河である、当然河口などでは舟による渡河ということになつたであろうが、白河という上流においてはどのような川の幅で、どのような水流で、それがどのような渡河方法をもたらしていたのかというのが、私の素朴な疑問であり、現地の様

子を見てみたいという願望となつていた。

南湖公園からマイクロバスは白河市内の繁華街を避けて鹿島神社のほとりにある鹿島橋を渡る、これが阿武隈川である。旧陸羽街道の渡りは、ここより半里ばかり上流ということになり、川幅などにあまり変化はなさそうである。川幅は何米ぐらいであらうか、水量はあまり多いようには見えなかったけれど、二百米ぐらいの川幅であらうか。黒羽町内を流れていた那珂川、舟渡しであつたと言われた那珂川より川幅は広くて、水量は少々少いという感じ、とすれば、この阿武隈川の“渡る”という行為は、舟渡しであつたろうと思われる。白河は城下町、同じ城下町の黒羽の那珂川が舟渡しであつたことからの類推である。

## 二

“渡る”という語を辞書的に見ると、『日葡辞書』に“橋、川などを一方から他方へ通過する。”と和訳されているように、“此の岸より彼の岸へ越え行く。水の上を越え行く。”(『大日本国語辞典』“わたる”冒頭説明)というものの、近時の古語辞典類では一層詳細な説明が付してある。岩波の古語辞典を見ると、『ワタ(海)』と同根。水面や空間を直線的に横切つて、向う側に着く意。移行の経路がはっきりしているので、出発点と到着点との二つの方面にかかわる意も表わし、平面的な広がりに関してというよ

うになった。また、時間的に、過去から現在まで引き続いて存在する意』と説明あり、まず『海や川などの水面を通路にして、直線的に通って対岸へゆく。①(水の上を、馬や舟などを使って)向う側へ移る。―中略―③橋を通って向うへ行く。―略―』と解する。この第一義が、正にこの『渡る』に当るのであるが、渡る方法については全く問わない語のようでもある。小学館の国語大辞典では、『わたる(渡・済・渉・互)』『自ラ五(四)』『一ある経路を通って一方から他方へ行く。①船や馬などに乗って、また、泳いだり浅瀬を歩いたりして、海や川の一方の岸から他方の岸へ行く。―用例略―』などあって、これも第一義が当るのであるが、渡る方法については、一層幅広く饒舌である。当然に渡る方法を特定するは不可かと言えよう。小学館の古語大辞典でも、その第一義が当該の意たるは同断であって、『語誌』には『上代の用例および名詞形の意味などからみて、もと水上を移動して一方から他方へ位置を変える意だったと思われる。『わたす』はその他動詞。それが、一定の空間ないし時間を経て位置の移る意に広く用いられるようになり、また、他の動作・作用に空間的・時間的な広がりや意を添える用法(⑫)も生じた。敬語としての意味(⑪)の派生は、『行く』『来(く)』の意の敬語と『あり』の意の敬語が同一語であることが多いのに類推して生じたものであろう。』とあって、岩波の古語辞典と

大同小異の説明が載る。要するに、『渡る』の語は、方法は何であれ、一方から他方へ直線的に移動することを示すのが原義であり、この『渡る』はその原義にもっとも近い意ということになる。

ところで、『増補俚言集覧』に

○わたる わたるといふハ川をわたるといひ山をハこゆといふ只ありく事もわたるといふ○前わたり○うちわたすおちかた人○祭のわたるなといふふるさとを川と見つゝもわたるかなふちせありとハむへもいひけりかハは彼れかれハと川とをかねたる歌なり

増わたる 亘も竟も径も渉も済もわたる也亘ハ引はりわたす也竟ハ向までとゞく也径ハさしわたし也渡ハ向までこへゆく也渉ハ水中を通り行なり済ハわたり課せる也とある。増補部分は、漢字のワタルと訓ずる語の解説であるが、冒頭の『こゆ』との対比は注目される。『わたる』方法とは別に、対象が『川』であるに對し、『こゆ』は『山』を対象としているというのである。岩波の古語辞典では、『《コエ(蹴)》と同根。目的物との間にある障害物をまたいで一気に通り過ぎる意』とあって、第二義に『②(山・丘坂など、平地でない所を)通過する。突破する。』とあるのがそれに当る。ところが、『おくのほそ道』の『こゆ』の用法には、白河の関の章で『雪にもこゆる心地ぞする』とあるように大半が『増補俚言集覧』に説くごとき

状況で用いられているが、佐藤庄司の旧跡の章で「月の輪のわたしを越<sup>こえ</sup>て」のごとき、一例だけではあるが川を渡るのを「こゆ」で表現してあるのも見受ける。更に曾良の随行日記を見ると、「渡る」と「越ゆ」が川を対象として同義で混在するごとくである。日記の中で「越」の初出は、「此間婆川越ル」とあるもので、すぐ続いて「川原ヲ通り川ヲ越」とも見える。（深川出立直後の廿九日の条）『おくのほそ道』と同じところと思われるのは「右ノ所ヲアブクマ河ヲ渡リテ行」とあって、同じ表現と言えるが、阿武隈川関連のところを見るに「アブクマ川を舟ニテ越、本通日出川へ出ル」「供中ノ渡ト云テ、アブクマヲ越舟渡し有り」「右ノ渡ヲ跡へ越、舟着ノ岸ハ細道ヲつたひ」「川ヲ不越、右ノ方へ七八丁行テ、アブクマ川ヲ船ニテ越ス」などあって、「越」という字を川を対象に用いる例も多い。最後の例のように、「コユ」ではなく「コス」と訓んでいるのもあり、「越」の字を曾良がどう訓んだか不確かなところではあるけれど。月の輪の渡しのところはどうなっているかと言え、ソレヨリ瀬ノウエへ出ルニハ月ノ輪ノ渡リト云テ、岡乃渡ヨリ下也。ソレヲ渡レバ十四五丁ニテ瀬ノウエ也」とあるように、「渡る」と表現している。こうして見ると、少くも曾良の表現意識としては、川を「渡る」というのと、川を「越」というのとの間に、明確な区別はないと言っているのではないかと思われるのである。

表現価値の差はあるのかも知れないが。

曾良の随行日記における「越」の用法を踏まえて今一度『おくのほそ道』における「越ゆ」を見てみると、芭蕉には『増補言集覧』に説くごとき、一種の規範意識があったのかと思われる。『おくのほそ道』における「越ゆ」の用例十四例中十三例までが関なり山なり谷なり（曾良の句に「波こえぬ契ありてやみさこの巢」というのが象瀉の章に著録されているが、この「波」というのは山と同類と考えてよいであろう。）を「越ゆ」としているからである。日常語的感覚で記録した随行日記と、古くからの紀行文類を念頭に記す『おくのほそ道』との表現意識の相違が、こうした結果をもたらしているのであらうか。とすれば、先に挙げた「月の輪のわたしを越」の例は、全く異例に属すると言えるのであるが、この用法はいかに考えた方がいいのであろうか。ここは、「月の輪のわたしを渡って」と規範意識に従って表記した場合を考えてみればよいのではないか。「わたし」を「渡って」という同一音によるくり返しになるのを嫌って避けたと考えてみるのである。「月の輪のわたし」は固有名詞であって変えようはない、その「月の輪のわたし」は阿武隈川の渡しの一つであるから当然「渡る」という語を用いるべきであるけれども、「わたし」音のくり返しは芸のない話、ここは日常語的感覚で申せば違和感のなくなっていたらしい「越ゆ」を用いた

方が効果的であると、芭蕉は直感的に感じたのではなかったか。と考えれば、この異例の一例も何とか処理できて、芭蕉の「越ゆ」の言語感覚は、『増補俳言集覧』に記したごときを充分認識していたということになるうか。

脇道に外れてしまったようである、ここでは「渡る」という語には、川を「渡る」ための手段とか方法とかを表現する機能は本来無いらしいということを確認すればよいのである。

### 三

黒羽城下での那珂川の舟渡しという実態から類推して、白河という城下町を流れる阿武隈川も舟渡しであつたらうとした、そのことについて再説する。

黒羽の町は、小なりとは言え大関氏一万八千石の城下町である。那須野を越えて大田原を経て黒羽街道を奥沢、金丸と進めば、山野という集落を通って黒羽の町、町家を中心とした町並みが那珂川沿いに開けており、上町・下町・黒羽田町などという町名が見られる、その町並みを那珂川沿いに旧陸羽街道が白河を指して北上しているのであるが、その対岸に黒羽城趾が望まれるのである。

黒羽城趾は今は郭内と呼ばれている、小学校やらお宮やらお寺やらがあつて、浄坊寺さんのペンションもある一帯である。大関氏及び家士たちの代々の墓があつて菩提寺で

ある大雄寺もそこにあるので、小さなお城と武家屋敷が集まっていた一郭であると思われる。とすれば、黒羽城趾を囲むはずのお堀の痕跡も見受けないほどの規模であつてみれば、那珂川は天然の堀割の役目を果していたことになる。この天然の堀割、奥州側よりの侵攻に対しては有用ではないけれども、関東側よりの侵攻には役立つと思われる。江戸期に入ってから、小さな砦的黒羽城にとってこうした配慮は無用のことであつたかも知れないのだが（正室に徳川家の子女を迎えるということをしているのを見ると、政略的な考えが大関氏側にあつたことは充分察しられるが）、小田原の北条氏を中心に群雄割拠していた戦国末期に立地した黒羽の砦であつてみれば、こうした配慮も必須であつたはずである。当然、こうした配慮あつてのことであれば、那珂川に架橋するはずもなく、舟渡しが通常の策であつたはずである。江戸期に入つて平和到来といつても、この配慮を取り除くことは考えられなかつたらうし、日常生活には左程不便は感じなかつたというのが常態ではなかつたか。黒羽城下の那珂川が、幕末まで舟渡しであつたというのもうなずけるのである。

ところで、白河の方はどうか。旧陸羽街道を境の明神を越えて下つて行くと、泉岡・皮籠・小丸山などという集落を通り、南湖公園を右手に見て松並という集落に入ると白河市の町並みという感じ、谷津田川という三軒ばかり下流の

の旧白河城跡のあたりで阿武隈川に合流する小川を渡れば白河市内である。町内を通り過ぎて線路に行き当るとJRの東北本線、白河駅があつてその裏手が小峰城跡である。

関東と奥羽を分ける要衝の地にある小峰城は、寛永四年入部した外様大名の丹羽長重が、江戸幕府の命により白河小峰城を大修築、城地の南を流れていた阿武隈川を北側に付けかえ、城域を拡張し町割りを行った。『国史大辞典』吉川弘文館』という、芭蕉が旅した元禄二年当時は松平（奥平）忠弘が城主で、譜代の十五万石という大名の居城であつた。現在も残る堀割り（阿武隈川を北側に付けかえたという時に残った河筋を堀割りとしたのかも知れない。）が城の西北を囲い、その北側を更に阿武隈川が流れているという構えで、奥州側に対しては極めて防備を堅固にしているという感じの城構えである。黒羽城とは逆の構えではあるが、阿武隈川が防備の役目を荷っていると考えてよく、当然この阿武隈川に橋が架っていた可能性は少く、黒羽城の那珂川と同じく舟渡しであつたと考えてよいであろう。

白河小峰城は、戊辰戦争の争乱に巻き込まれ、防備堅固な阿武隈川側でなく、関東側から新政府軍に攻め立てられて落城、攻防をくり返している間に廃墟となつてしまった。

#### 四

“あぶくま川を渡る”という“渡る”は、阿武隈川の方の岸から向うの岸まで行き着くことを表現する語であり、その渡る手段を示し得ていないのであるが、その実態は舟渡しであつたろうことを説いてきた。ところで、何故ここで川渡りとして阿武隈川が出てくるのであろうか。『おくのほそ道』で、川を渡ったことをわざわざ記しているのは、ここが最初なのである。

“わたる”の表現は、雲岩寺参詣のところで、“十景尽る所、橋をわたつて山門に入。”というのがあるが、武茂川という小さな川を渡す瓜颯橋を“わたる”に用いている。ここは、雲岩寺の五橋の一つで、雲岩寺に入る最初の橋で印象深い瓜颯橋を渡るといふところに主眼があつて、武茂川を前面に押し出していないので、川渡りの記録としてはやはり阿武隈川が最初としてよいであろう。

芭蕉が『おくのほそ道』で阿武隈川に至り着くまでに渡った川は、武茂川並みのものを含めると無数と言ってもいいのである。著名な川を気付くままに数えて見ても、千住にあがつて栗橋で大利根川を渡るまでに、越谷や春日部で相当大きな川を渡っているし、曾良の随行日記を見ると、喜沢から日光街道に別れて鹿沼に至る間で娑川とか小倉川とかを渡っている。鹿沼から例幣使街道を通つて日光参詣

間にも小さい川を幾つか渡っているはずで、日光から黒羽の間にも大谷川から鬼怒川、下流では那珂川に合流する荒川などという著名な川を多く渡っているのである。

にもかかわらず、それらの川渡りについては一言も言及せずして、阿武隈川に至って殊更に川渡りを云々するのは何故か。事は簡単である。阿武隈川が歌枕であったからである。

「やゝ年も暮春<sup>くれ</sup>立<sup>たて</sup>る霞の空に白川の関こえん」と旅立った芭蕉であるから、念願の白河の関を越えて、始めての大きな城下町たる白河で、白河の関を越えて初めての川、奥羽の国に入って初めての川、それだけでも印象は鮮明であり、記録するに値する感動を喚起し得たであろうことは考えられる。しかし芭蕉にとっては、歌枕として名のみに聞く大河たる阿武隈川であつたればこそ、ここに著録しなくてはならなかつたのではないか。名勝備志録の中に、

○加嶋<sup>白川ノ東也。町ヨリ近シ</sup> ツラク氏忘ズ恋ン。・ーナルあブクマ河のアフセ有やと

と著録し、

○阿武隈 白川ノ町ハヅレニテ渡ル。仙台近迄流ル。

と記すのであるから、芭蕉主従の念頭から、阿武隈川が歌枕であることが寸時も離れなかつたであろうことは確言できるのである。その歌枕たる阿武隈川を目前にし、渡つたのである、曾良も随行日記に、

○二方ノ山、今ハ二子塚村ト云。右ノ所々アブクマ河ヲ渡リテ行。二所共ニ関山ヨリ白河ノ方、昔道也。二方ノ山、古歌有由。

みちのくの阿武隈河ノわたり江に<sup>鉄匠</sup>人忘れずの山は有けりと記録しているのである、芭蕉とて一筆書き残すべきであつたのである。

阿武隈川が歌枕であること、『和歌大辞典』の当該箇所を引用するを便とする。

○阿武隈川<sup>あぶくまがわ</sup> 『歌枕』岩代（今の福島県）の南の旭岳から北流して陸前（宮城県）に入り、太平洋にそそぐ川。古今集（一〇八七）の遠奥歌<sup>みちのくた</sup>「阿武隈に霧たちくもりあけぬとも君をばやらじ待てばすべなし」は有名だが、その後、霧をよんだ歌は意外になく、ほとんどが「あぶくま」の「あふ」と「会ふ」を掛けた表現で一首をまとめている。その中には、当然「ゆくすゑにあぶくま川のなかりせばいかにかせまし今日の別れを」（新古今八六六、経重）というような男同士の歌もあり、また「君が代にあぶくま川の底清み世々を重ねてすまんとぞ思ふ」（詞花一六一道長）の如く聖代に「会ふ」意を含ませたものもあるが、大半は「ぬれぎぬといふにつけてやながれけむあぶくま川の名こそをしけれ」（堀河百首・永縁）のように男女が「会う」ということを掛けたもの。

（片桐洋一）

## 五

マイクロバスは、阿武隈川畔の鹿島神社参拝（曾良の随行日記に「うたゝねの森、白河の近所、鹿嶋の社の近所。今ハ木<sup>八雲二有由</sup>かしま成うたゝねの森橋たえていなをふせどりも二本有。通はざりけり」など著録されており、芭蕉主従が立ち寄った可能性がある、○印のある部分とて「相楽乍単ノ伝也」のみかも知れないが。）を終って一路殺生石の在所たる那須湯本温泉に向う。白河市の北側を西に向って、鶴生、追原などを経て新甲子温泉がある由井ヶ原から那須甲子道路に入り、赤面山、朝日岳などを右手に見て那須国民休暇村に案内される、皆々とんと興を示さず直ちに殺生石に向う。那須岳山麓である。

殺生石は、今や観光資源である。観光客も多く見られる。私どもは、マイクロバスで大きく迂回して湯川という小さな川に架る橋を渡ったところで下車、小さな展示館あって広場あり、いでゆばしを渡って硫黄の臭気が満ち黒灰色の岩石が山積している賽の河原に入る。湯の花を採取する装置があったり、活火山であるから、その観測用と思われる施設あったりで、人の通る道も明示され、殺生石周辺には柵がきちんと出来ており、全体が整理されている感じである。いわゆる殺生石には卒塔婆的な「殺生石」と明示した木札が立てられ、「史蹟 殺生石 栃木県」とある大きな

丸太をけずった標示がある。思っていたより小さい石、玄翁和尚に済度された時に少し砕かれたかなど想うことである。芭蕉が「殺生石は温泉の出る山陰にあり、石の毒気いまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す。」と記した荒涼たる風趣は、今はうかがうこともできそうではない。時の流れであり、安全第一に守られている私どもは、果して幸せなのかどうかと思うことである。

殺生石に向って右手を見ると、石の香橋（随行日記に記録されている「石の香や夏草赤く露あつし」の句碑があり、その句にちなんだ命名であろう。）を渡って小高いところに何かあるというので歩いて行くと、那須温泉神社である。芭蕉たちは、随行日記を見るに湯本温泉の五左衛門方に宿して、温泉神社に参詣し殺生石を見ている。私どもはその逆で、神殿のある方から入って行って神社入口に抜ける道をたどる。宝物館あって見学をお願いしたが、本日閉館とかで見せていただけなかった。随行日記に記す「与一扇ノ的躬残ノカブラ壺本征矢十本囊目ノカブラ壺本檜扇子壺本金ノ絵也。正一位ノ宣旨縁起等拝ム。」というのは、現在も残っているようであるが、見るを得ずして念を残した次第。絵葉書買って退散である。神社の建物は新築、隅々まで新しくなっていて、「面目を一新した」「奥の細道を歩く事典」久富哲雄著）とあるとおりであるが、何とも素気ないことである。周辺の木々も、古社寺に残る古木という

趣きのものは少く、何となく若葉青葉という感じであった。

一日の予定を終って、マイクロバスで湯本の温泉街を通り抜けて（この温泉街は、芭蕉当時のものとは違うのと、安政五年六月の山津波で湯本の温泉宿二十軒が全滅したので、この湯場の宿屋は、温泉神社前の坂道の両側（前引事典参照）に移転したという、芭蕉当時は湯川のほとりで殺生石に近いところに立地していたのであろう）、一路黒羽に向う。途路、那須友愛の森という広大な施設で買物することとなる。栃木県那須郡那須町高久乙五九三―八に立地する授産施設で、ふるさと物産センターもあって那須産の土産ものが多く陳列してある。女子学生は、盛んに物色している、購買欲は若さの特権であらう。しかしこれだけの施設が閑散としている実情は、ふるさと再生の困難さが顕現していると言えよう。

友愛の森が高久である。マイクロバスは、松子・高久・野間などいうところを通過していく、芭蕉たちが黒羽から殺生石に向った道を、ほぼ逆コースで辿ることになると浄法寺さんが説明される。道筋は大分新しくなっているようであるが、高原の林の中を行くという印象のところが多い。那須野というイメージとは少し異なるようである。早朝からの疲れで、ウツラウツラの車中であるから、正確な印象は保証できない。

夕刻、ペンション到着、入浴、夕食とすませて、早速に就寝と思ったら、学生諸君は夜おそくまで四方山話である。これまた若さの特権である。

## 六

九月三日（木）、那須塩原駅十三時十一分の東北新幹線で東京に向うことになっているので、黒羽町内の芭蕉遺跡見学は半日という忙しさである。桃雪亭跡や大雄寺は前日の朝に自由見学していたので省略して、那珂川を越えて黒羽町内の光明山常念寺の見学から始める。その前に、前夜のこと浄法寺さんに、黒羽の名物の美味しいものはお尋ねしたら、那珂川の清流で獲れる鮎の甘露煮（三二四）〇二栃木県那須郡黒羽町大字黒羽向町三の高橋商店製造のものが、伝統的製法を伝えていて一番だとのこと、芭蕉は美食家であったとは聞かないが、料理人であったという説もあることとて無関心であったわけではあるまいし、食べものに興を有したかどうかは別として、浄坊寺家の賓客として地方の名物は食膳に供されたに違いなく、鮎の甘露煮も私も同様舌鼓を打ったかと思うことであった。と、城下町らしく愛月堂の天赦という名菓がおいしいと推賞されたので、黒羽のバスセンター的駅前十字路角にあるお店に立ち寄る。近代的に改築されていて老舗という雰囲気はないけれど、天赦という菓を主材に小豆で羊羹風に作りあげ

た贅沢なお菓子の外に、栗娘・五峰餅・富貴の露・四喜満堂など言った優雅な名称を付けられたおいしそうなお菓子が沢山並んでいる店、それらはお茶菓子に最適という風趣があつて、古い落着いた城下町の生活情緒を感じたことである。酒より菓子に興を持つようになったのも肝炎のせいだが、世も末である。

さて常念寺は町家の中にある小さな寺、愛月堂の近くにあつて大雄寺とは別趣、狭い参道の右側の茂みの中に芭蕉の句碑がある。那須野での句「野を横に」が細長い自然石に刻されている。この常念寺は芭蕉主従の黒羽滞在には特別な関係はないけれど、この句碑の存在によって、黒羽の観光ルートに設定されているようである。句碑の揮毫者も建碑者も、その建立年代も記していないので何とも判らないが、相当年代ものではあるらしく、江戸時代の黒羽における芭蕉礼賛の空気を感じ得できる遺物と言えよう。

次は黒羽街道を逆行して太田原市南金丸にある那須神社、通称金丸八幡宮に参詣する。那須一族の崇敬を受けた八幡宮で、由緒あるお宮であるらしい。楼門と本殿は近世初頭の建築らしく、本殿には華麗な彩色や彫刻の痕跡があり、桃山期の建築様式の残映がうかがえるが、周辺の雑草とともに頽廢の色が濃い。お祭りなどともなると、清掃もされるのであろうが、今も崇敬的という雰囲気はない。本殿と楼門を残して大半は火災で焼失したままだと、浄法寺さ

んの説明であつた。

『おくのほそ道』では、「それより八幡宮に詣。与市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八まんとちかひしも、此神社にて侍と聞ば、感応殊しきりに覚えらる。」と記して、その感銘のほどを伝えている。源平合戦時代の伝承には殊更に感動する癖のある芭蕉であるから、変り栄えのないお宮であつても、那須与一の名前を聞いただけで感銘したかも知れないが、一万八千石とは言つても黒羽の領主たる大関氏が二代にわたつて修築したというのであるから、地方のお宮としては輪奐の美を有しており、それが芭蕉の感銘にそれなりの影響を与えたと思われる。少くとも、今眼前にするほどの荒廢の様子を芭蕉は見なかつたはずである。

黒羽街道を反転して西坪という集落から左折し一軒少々で余瀨である。芭蕉の「修驗光明寺と云有。」と記す光明寺跡が小さな公民館から右折したところにある。道路より少しばかり高くなつていて、民家と畠とあるところが廃寺跡という、四足門の跡もあつて、相当規模の寺であつたことが判る。道路傍に「修驗光明寺行者堂址入口」の標柱があり、安部能成学習院長揮毫になる「夏山に」の句碑も建つており、土地の人のこの地を顕賞しようとする姿勢をうかがうことができる。この民家は津田家、元禄頃の光明寺住職である津田源光権大僧都の後裔にあたる、浄法寺さんのお話では、この光明寺には桃雪の姉にあたる女性が嫁

入っていたという。随行日記に「九日、光明寺へ被招。昼ヨリ夜五ツ過迄ニシテ帰ル。」と記す。普通の寺社の参詣とは異なる訪問の仕方をしているらしいのも、桃雪・翠桃兄弟と特別の関係ある寺であってみれば、うなずける話である。

余瀬には鹿子畑家の墓がある、光明寺跡からほんの一足である。道のほとり、水田の一面に相当な広さを有する墓地で、何基かの墓の中で「不説軒一忠恕唯庵居士」と法名を刻したのが翠桃の墓と言う。右側面に、「享保十三年戊申天初冬廿八日」と没年月も刻されている。その墓地に接して見渡せる水田が、鹿子畑家の屋敷跡とのことである。屋敷跡の数反はあるかと思われる水田の向うには、こんもり茂った林も背景となっており、何となく地方豪族の屋敷とでも言う構えであったのではないかと想像することである。兄桃雪を五百石の城代家老浄法寺家の養子に出し、弟翠桃は四百五十石という鹿子畑家を嗣ぎ、光明寺には姉が嫁入るといふ鹿子畑家、その家の由緒が偲ばれることである。

更に少し北に向うと、左側に白旗山西教寺がある。浄土真宗のお寺で、明治初年の開墓という、黒羽藩における幕末の変動の歴史が反映しているお寺らしい。白旗山という山号は、応永年間に大関増清が余瀬に築城したお城の名に由来すると伝えられ、境内にその由来を刻した石碑があり、

また長谷川かな女の筆になる曾良の「かさねとは」の句碑がある。芭蕉様は全くご存知ないお寺である。

西教寺から北上して大字の蜂巢という集落の十字路を左折すれば、小字で篠原という集落に出る。那須の篠原で、左手の杉の林の中に玉藻稻荷神社がある。こんもりした林であるが周辺の杉も若木が多く、鳥居などあって神社の体裁をきちんと整えてはいるが、小祠というに相応しいたらずまいである。小祠の手前の横手にある小さな池が、金毛九尾の狐の伝説に付会される鏡が池である。玉藻前の伝説という縁起は古いのであるが、社前にある石鳥居の銘文も寛政十二年の建立であることが明記されており、何となく全体的に若造りの祠である、芭蕉訪問時のたたずまいはどうだったのであろうか。左程に感銘を受けたような記述ではなさそうである。鏡が池も、今は枯草が浮んでいたりの小沼という感じで、蟬に化した狐の姿が水面に果して写ったかなと疑問にしたいほどのものである。湧水らしいので、本来は清冽なのであろうが。ここにも句碑がある、昭和年代の建立で俳諧書留に著録されている「秣おふ人を」という歌仙の発句である。

黒羽滞在中に芭蕉が訪問したところは、犬追物を除いてこれで終りである。新幹線の時間が決っており、マイクロバスは一路那須塩原駅に向う。これで今回の研修旅行は終幕である。

## 七

『おくのほそ道』の黒羽滞在中の記述と、曾良の随行日記に見られる実際とが異なることについては、四月三日から十六日までという長逗留にもかかわらず、雨にたたられたとは言え、まだ旅疲れとて少ない時期にしては無為に過していることと共に論あるところであるが、今ここに新しく付け加えることはない。

随行日記によると、五日に雲岩寺見物、九日に光明寺招待、十二日に篠原見分、十三日には八幡宮参詣とある、『おくのほそ道』では犬追物、玉藻稻荷、八幡宮、光明寺、雲岩寺の順に記述している。光明寺と雲岩寺は別として、余瀬の翠桃宅からの見分出立となると、犬追物・玉藻稻荷・八幡宮という記述の順序は、地理的に極めて正確な順序ということになるであろう。

この記述は、随行日記との相違を捉えて虚構性とか創作性、あるいは文学的とか紀行的とかなど評されるところであるが、それはそれとして恐らく方向音痴ではなかったであろう芭蕉の脳中には、地理的に極めて整然と整理記憶されており、それに従って記述しているのである。光明寺も、翠桃宅からの訪問であったから、ここに位置付けて好適であったし、雲岩寺も、桃雪宅からの見物であって、別途に記述して然るべきものであったろう。見物日時に前後

はあるけれども、そこに事実との相違は確かに存在するけれども、『おくのほそ道』ではそれを整然と秩序正しく記述していると言えるようである。私どもの黒羽訪問は、そのことを確認する旅であったのである。

### (付記)

“とかくして越行こしゆくまゝに、あぶくま川がはを渡る”という一文の“渡る”という語句について贅言したけれど、今夏(昭和六十三年九月一・二日)、白河市周辺を再訪したので、前言の補訂を含めて再言する。

今夏は、学生諸嬢と平泉から立石寺まで、芭蕉の足跡を辿った、そのことは別に報告するとして、その帰途、須賀川と白河とを訪れたのである、昨夏のマイクロバスによる探訪では“渡る”考が不十分と考えたからである。九月一日、早朝八時過ぎの列車で、仙台行と山形行のグループに分かれて、私どもの旅行団は解体する。過半の学生が、残りの日を仙台と松島見学に割り振っており、仙台行の列車に乗るわけである。仙山線は単線で、山寺駅は何時も上下線が行き違うところ、山形行に乗ったのは酒田市見学を目指す二人(橋口・森岡両嬢)と、初老の私の一人旅をあわれんで同行しようという二人(久保田、綱脇両嬢)の計五名。

山形からは特急つばさ八号で須賀川に向う。山形駅頭で橋口君たちと別れ、以下三人旅である。須賀川駅には十一時五分着、タクシーで須賀川市内の芭蕉遺跡を馳足で一巡する。まずは等窮宅跡と栗の木を目指す。「奥の細道」を歩く事典（久富哲雄著）という便利な本があるので、それを手引にタクシーの運転手に行先を指示、どうも安易で安楽な「おくのほそ道」である。

※

※

※

JRの須賀川駅は、須賀川市の北のはずれというところにあつて、等窮宅跡へは大分南下しなくてはならない、しばらく南下すると相当の河を渡ったので、阿武隈川かと尋ねると釈迦堂川と答える。大分下流で阿武隈川に合流すること、ここからは見えませんということであつた。地図で見ると、せいぜい一軒少しの下流なのだが、確認するに至らない。「渡る」に関連して川幅を確認したかったのである。随行日記では須賀川の次の宿場である守山宿の少し下流、今の田村郡田村町では「カナヤト云村へかゝり、アブクマ川を舟ニテ越」とあつて、舟渡しであつたことが明記してあるのである。白河市の阿武隈川と須賀川のその川の川幅を確認すれば、江戸時代の「渡る」の方法の在り様がかがえるかとも思つたのであるが。

町中を一軒ばかり南下すると、須賀川を中心街、赤トリキデパート前を通り過ぎてしばらく進むとNTT須賀川の

ある町角に着く。歩く事典に「等躬邸は須賀川市本町の伊藤薬局から南の須賀川電報電話局にかけての、かなり大きい屋敷であつたと言われている。」とあるところ、須賀川の奥州街道に面した中心に位置しており、これだけの屋敷をかまえていたとすれば、相当の財力の持主と思われる。等躬については、相楽氏通称伊左衛門、自単斎・乍単斎・藤躬・東籬軒・選庵などとも号する石田米得門（後岸本調和に近づいたか）の俳人、「岩城平の藩主内藤露沾の知遇を得、正徳五年十一月十九日岩城に於て没した。年七十八。須賀川長松院に葬られた。」（矢部椿郎編『福島県俳人事典』）などあるが、その職分については岩波文庫の脚注に須賀川の駅長と記されて、その説を踏襲するのが多いようである。詳考に依れば、「道註」に「検断役勤」とあり、荻原井泉水の「奥の細道ノート」には「町長」とも記している。江戸時代の註である検断役、後人の注である駅町、町長という役職名は何を指すのであろうか、今一つ私には不分明である。これを明らかにするためには、近世時における須賀川の政治の在り様を明らかにしなければならない。歴史家にとっては易々たる業であらうが、私にはよく判らない。

飯野哲二の精講には、須賀川について「今の須賀川町、奥州街道の大駅。天正以前は二階堂氏の拠つた所。その後天領（幕府直轄地）となつた。」とある。（精講は、等躬に

ついても「須賀川駅の駅長。」と注する、岩波文庫は、この説を踏襲したか。角川文庫の脚注にも「当時天領」とする、もし天領とすれば、それに応じた政治体制があったはずであり、奥州街道の宿駅であったことは確実なので、それに応じた諸設備があったはずであった。まずは代官所とその付属設備があり、本陣や脇本陣という宿駅施設、馬や駕などという交通機関を差配する問屋場などもあって、それぞれに相当の役職の人々が居たはずである。駅長にしても町長にしても、その体制の中で代表者ということであろうが、さてその役職の在り様がよく判らないのである。

まず天領であるかどうかであるが、吉田東伍の「大日本地名辞書」には、「文化元年須賀川鑑云、川中郷牛袋庄須賀川、四箇町、南入口より北出口まで、拾五町拾五間、御制札場は中町に在り、道場町の清水の流れを、須加川と名づけ申候。蒲生領の時、田丸中書、田村郡守山に在居し御預也、上杉領の時、栗田刑部、中宿村の愛宕山に在居御代官なり、其後は代々白河城主御領分に御座候。」と見えるし、近時の「国史大辞典」（吉川弘文館）でも「近世初頭には、会津を領したもによって支配されていたが、寛永二十年（一六四三）の加藤氏封地返上のちは、市の中心部が白河藩領、周辺地域は越後高田領、長沼領などに細分化されていた。」と記するので、天領とすべきではないのではなからうか。ただ、統治上は代官所があったよう

もある。角川の地名辞典には「はじめ会津領、寛永二十年からは白河藩領。」として、統治体制については「慶安年間頃に須賀川に代官を置くようになり、郷土筆頭の相楽七郎兵衛が代官に起用され（相楽家文書）、その後北郷代官が設けられ、その下に町会所が設置された。須賀川全体の行政事務はこの町会所において処理され、運営は代官加役・大庄屋役・検断・庄屋・高年寄・年寄などの町役人が月番制で担当した。」とあるのである。宿駅機能としては、

「問屋はじめ中町にあったが、慶長三年の訴訟により本町・北町へも設置され、その後、道場町にも置かれたと推定される。本陣は享保十二年に一軒、嘉永五年に三軒とある。」（相楽家文書・清水家文書／本陣の研究）と見られる。これらを統括すれば、須賀川の宿場町は、白河藩領ではあるが代官を置いて統治する町会所があり、宿駅としては本陣（当然脇本陣もあったであろう）も問屋もあったことが判り、近世時の宿場町の普通の統治組織を想定できるようである。そうした中で、相楽家というのが、相当な家格を持って重要な位置を占めていることがうかがえる。等躬が、その相楽家の一族であることは間違いなく、当時相楽家の当主であり、当然須賀川宿で相当な地位を占めていたであろうことは判るのである。

財力も相当なものであったであろう。随行日記によれば、  
「一 廿四日 主ノ田植。」とある。相楽家主催の田植田

樂であつたのではなからうか。この地方の田植行事がどのようなものか知らないけれど、広島地方に現在伝承されているものほどに派手な華麗さに満ち、結構物入りでもある田植行事とは違うのかも知れないけれど、曾良がわざわざ日記に記録しているのであるから、相当に目立つ行事であつたことは間違いない。相樂家が相当な田地持ちであつたことが判るし、その財力のほども推しはかれようというものである。

こうした背景を有する等躬ではあるが、駅長とか町長とか言つた近世時に聞きなれない役職名を有したかどうか、検断はあり得る役職名であるが、「道註」の言のごときに該当するかどうか、今速断はできない。町会所と問屋場との役職は兼ねることができるようであるから、等躬の役職も一方的に特定できないかも知れないし、ともあれ専家の研究を期待したい。

※ ※ ※

須賀川という宿駅の名家であり、奥州街道に面して、しかもこの宿場の中心という位置に大きな屋敷を構えていた（私は、つい本陣とか問屋を連想する。）等躬のところを尋ねた芭蕉は、等躬と白河の関越えについて問答してから「風流の始やおくの田植うた」という挨拶の句を残し、更に「此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとお僧」である可伸を尋ねて「世の人の見付ぬ花や軒の栗」

の句を残したことを「おくのほそ道」に記している。

ここで私見少々。「風流の」の句解については諸説あつて、詳考にも角川文庫の発句評釈にも説の整理がされている。それぞれに理あつて今ここにコメントするほどのこともないが、近時の諸説一致しているのは、随行日記の記述もあつて、即ち

○一 廿二日 須か川、乍単斎宿、俳有。

廿三日 同所滞留。晩方へ可伸二遊、帰ニ寺々八幡を拝。

一 廿四日 主ノ田植。昼過ぐ可伸庵ニ而会有。会席、そば切。祐碩賞之。雷雨、暮方止。

とあるところから、芭蕉が等躬宅に宿した最初の日である四月二十二日に俳諧あり、「おくのほそ道」の記述に従つて、等躬との間に白河の関越えをめぐつての問答があり、それに対する挨拶として「風流の」の発句あり、そして等躬・曾良との三吟の一卷が伝えられたとするのである。

この発句が二十二日に出来たとすれば、当然のこと「いよいよ白河の関を越えて、まず奥の田植歌を聞いた。（等躬邸における「俳有」の二十二日より前のことである。）そしてその歌の鄙めいたおかしさに感興を催したのが、この奥の旅路の最初の風流であつたというのである。」（角川文庫・発句評釈）との解が導かれる。芭蕉が聞いた田植歌は、白河の関を越えて須賀川への途次でのもの、特別の演

出あつての田植歌とは解されない、当然のこと「鄙めいた」という評語が冠せられるのである。

ところで、二十四日には「主ノ田植」が行なわれている。裕福で有力者でもあつたらしい等躬が主催しての田植行事であつたのであるから、そこが白河の関を越えた奥州の片田舎ではあつても、この地方での中心地たる須賀川であつてみれば、多くの見物を集めた華やかな催しであつたに違いないのである。そして、もしこの田植行事を見物して饗応を受けた後で、芭蕉が「風流の」の句を詠んでいたのだとしたら、「鄙めいた」という評語のかわりに「華やいだ」という評語が冠せられたかも知れず、「風流」という語の解も、近世的情調を含んだものになつていたかも知れないのである。西鶴の浮世草子などで「風流」に「ダテ」と振り仮名したごとくである。

曾良の「俳諧書留」に著録された「風流の」の歌仙には、「風流の」の句頭に「下」の印があり、最後の「元禄二年卯月廿三日」の頭に「天」の印のあることはよく知られている。旧岩波文庫の脚注には、それぞれ対応する語である。「上」「地」の印ある部分がここに挿入される証とされる。上・下の印のところに該当の文を挿入すると、「風流の」

の一卷の前書となる、「奥州岩瀬郡之内、須か川、相楽伊左衛門ニテ」と俳席の場所を示しているに加えて、「岩瀬の郡、すか川の駅に至れば、乍単斎等躬子を尋て、かの陽

関を出て故人に逢なるべし。」と芭蕉の感慨を記して前書としたのである。俳席が終つた後で、この前書は作成したと思われる。

天・地の印のところに該当の文を挿入すると、「元禄二年卯月廿三日」と日付がある前に、との日付が曾良の日記の「俳有」とある二十二日でなくて二十三日であることも注意しなくてはならないが、「この日や田植の日也と、めなれぬことぶきなど有て、まうけせられけるに、旅衣早苗に包食乞ん ソラ」の文章を入れようと考えたことが判る。この文章の「この日」というのは、「田植の日也」とあるから二十四日のこと、田植行事ということで関東・関西ではあまり見たことのない祝言の行事を見物して、その後で御馳走が出されたのである。須賀川という宿駅の有力者が招待されていたであらうし、賑やかな酒宴の席ではなかつたろうか。そして曾良の日記に見られる「昼過可伸庵ニ而会有。会席、そば切。祐碩賞之。」ということになり、俳諧に興を有する人々（連衆等雲、須竿素蘭以上七人）が可伸庵で「隠家やめだゝぬ花を軒の栗 翁」を巻軸とする歌仙を巻いたのである。

「風流の」の巻の中に、田植行事を見物した記事を挿入すべく意図しているのは何を示しているのであろうか。

「風流の」の句に、須賀川の等躬家主催の田植行事の在り様が揺曳することを許したのではないであらうか。とすれ

ば、前記角川文庫の評釈的解釈には、今一つ一考を要するとしてよいのではないだろうか。「風流の」の句に、一点の華やぎを見てみたいのである。脇句の「覆盆子」の赤色の鮮やかさとも、相共に照応するのではなからうか。

※ ※ ※

等躬邸に滞在した芭蕉は、可伸庵に二度も訪問している。よほど心を許し得る俳諧の仲間と感じたのでもあったろう。「おくのほそ道」には、

○此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。云々

と記す。「此宿」の訓み方であるが、文庫本類は一般に「コノシユク」と訓んでいる。詳考の摘註を見てみると、○須賀川の宿。宿は宿駅の意とするのが普通だが、「井本・新解」には「この宿（等躬の家）の近くに」とあり、井本説「蒼明・昭和29・6」に、「ヤド」とも読めさうだが、断定をひかえるといふ。矢部椿郎説「相楽等躬」もヤドがよいかとするが、俳諧書留にはこれに当る所に「同所」とあり、それは同宿駅の意らしく思われるので、一応前者として行く。「傍」といふのも、よくある如く、漠然と用ひ、むしろなまの事実を避けてゐる気味がある。とある。井本農一・矢部椿郎の両氏のみが、「ヤド」と訓むべきかとしながら、断定を避けておられる。井本氏は「おくのほそ道」の現場を実地踏査されている人、矢部氏

は福島県の地元の人である。お二人とも可伸庵の在所を確認された上で、「ヤド」と訓むかとされたのである。「シユク」と訓むとされる人たちは、「宿駅」の意に解しての訓みであるようである。「此宿の傍に」とあるのであるから、芭蕉の宿泊した等躬邸の「傍」に可伸庵を想定するより、宿駅たる須賀川の「宿の傍」と解するのが自然であると感じられるからであろう。

現在伝えられている可伸庵跡というのは、「安達屋北山陶器店の裏庭の土蔵脇に三代目と称する栗の木が繁茂していたが、今その辺は須賀川電報電話局の敷地と化し、その西南の一隅（通用門の脇）に栗の木三本が記念樹として植えられ、大きく成長している。」（歩く事典）と説かれるところ、等躬邸が現在のNTT須賀川の場合とすると、奥州街道に面して鰻の寝床と言うほどではないが細長い屋敷ということになる。これは、大きな町家としては当然な構えであり、その屋敷内の裏の路地に面して可伸庵が営まれていたというのは、極く自然な庵の在り様と考えるのである。それは、正に等躬邸の「傍」と呼ぶにふさわしいのである。当然のこと、可伸は等躬の経済的庇護のもとにあったと想定できるが、その屋敷跡の規模や田植行事を主催したという日記の記述などから想像される等躬の経済力からは、それは充分に可能であったと思われる。これらを考え合せると、「此宿」の宿は、芭蕉が宿泊した等躬邸を指すとして

よいように思われる。とすれば、「此宿」は宿駅を指すものとは言えなくなる。当然のこと従前「シユク」と訓んでいたのは訂正しなくてはならないはずである。

「おくのほそ道」における「宿」という漢字がどのように用いられ、どのように訓まれているのか、全十七例のうち「シユク」と訓むのが現在一般的であるのは、宿駅を指す「早加と云宿に」「檜皮の宿」などの外は、漢字二字の熟語で「旅宿」「宮城野の章、金沢の章」「一宿」「平家の章」の二例である。その他の「宿」の字は、「岩沼に宿る」「笠嶋の章」のように送り仮名あって明らかに「ヤド」と訓むべきもの以外にも、「温泉あれば湯に入て宿をかるに」「飯塚の章」「江上に帰て宿を求めば」「松嶋の章」「宿からんとすれど更に宿かす人なし」「平泉の章」「麓の坊に宿かり置て」「立石寺の章」「医師の許を宿とす」「酒田の章」「芦の一夜の宿かすものあるまじ」「加賀の国の章」「十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ」「敦賀の章」など、発句に「涼しさを我宿にしてねまる也」ともあって、皆「ヤド」と訓むのが一般であるようである。芭蕉がどのように訓まれることを期待していたかは知らないが、現在では漢字の熟語の場合と宿駅意味する時に「宿」を「シユク」と読む以外は、「ヤド」と訓ましているのである。

現在の辞書類でも、「シユク」と読む時には、宿駅の意

に解するのが一般であるが、『日本国語大辞典』には、①やどや。はたごや。泊まりやど。旅館。旅宿。※日葡辞書「Xucu (シユク) へ訳」宿屋。つまり、旅人が泊まる宿」※仮名草子・仁勢物語下五九「此男、牛を売りに行きけるに、そのしゆくの農人の女にてなむ有ける」※俳諧・笈の小文「飛鳥や雅章公の此宿にとまらせ給ひて」※人情本・春色梅児誉美初六齣「『ナニほんの仮宅だヨ』『ヲヤそれジャア浜の宿 (シユク) か舟川戸かへ』」との例があり、宿駅ではなく、旅館を「シユク」と呼ぶ用例が近世にはあることを示している。もっとも「笈の小文」の「宿」は、鳴海という東海道の一宿駅を指しているようであって、鳴海宿の一旅館を指しているとは言えないようである。「仁勢物語」の例も、内閣文庫本の写本には「やど」とあるところとて、古典大系の頭注に拠って「シユク」と読んだ「宿」を「宿屋」と解してよいかどうかは一考を要しよう。「春色梅児誉美」の例は正に適例であるが、これも一寸洒落て表現した気味あって、「おくのほそ道」と等質のものとは言えないようである。

このように考えてくると、等躬邸の庭先を借りて庵を営んでいた可伸庵の在り様は、「コノヤドノカタハラ」と読むにふさわしいとしてよいようである。

※

※

※

等躬邸のあったと言われるNTT須賀川脇の小さな路を

入って左折すると、「軒の栗可伸庵址」と標柱あるところ、小さな田の中にに四代目という栗の木が繁茂している。裏露地という感じのところで、記念すべき場所としてきれいに整理してあり、説明板も丁寧であるけれど、NTT須賀川の裏手とて「太山みやまもかくやとしづかおぼえ間におぼえ覚られて」というほどではない。これも時の流れかと感慨するとともに、栗の木に西方浄土とやら行基菩薩とやら大仰な故事付け効能書を呈上されて、気楽に軒の栗を食することが出来なくなったかも知れない栗齋可伸の迷惑顔を想い浮べたりするのは、俗人の当て推量であろうか。「伊達衣」等躬編元禄十二年刊参照）

タクシーで一区画分西に向うと須賀川市役所や公民館・図書館など公共の建物群のある一画、それを左手に見ながら今まで南行した奥州街道の西の裏道ともいべきを逆行して長松院へ向う。運転手さんが市役所前の広場あたり八幡町といって昔は八幡神社など色々あったらしいと話してくれる。日記の廿三日の条「寺々八幡を拝」というのは、このあたりにあった神社仏閣を指すのであろうか、可伸庵（註二）から指呼の間である。

万年山長松院は曹洞宗の禅寺、等躬の菩提寺でもある。由緒ある寺なのであろうが、大変立派な町中の寺で、古びたという風情はない。蚊に喰われながら、裏手にある墓地の中に入っていくと、奥まっぴら一寸探にくいところであ

るが、等躬夫妻の墓がある。当地の有力者の墓にふさわしく立派なもので、須賀市作成の説明板もある。正徳五年没（七八歳）ということも墓碑銘によって明らかにされる。お参りして境内に帰り、改めて大きな句碑を見る。昭和三十三年五月に須賀川市の観光協会などの力で建立されたものらしく、立派なものである。「あの辺りつく羽山哉炭けふり 等躬」とある。

奥州街道をはさんで長松院の反対側の少し小高い丘の上に、人口四万数千の小さな市には不相应に見える立派な構えの須賀川市立博物館がある。歴史民俗資料館も付設されており、前庭には可伸庵跡より移転された句碑「世の人の」がある。文政八年のもので「文政八年乙酉八月建置 雨考竹馬 英之 阿堂」と刻印されている。博物館内には、女子職員の人が一人おられて親切に応待して下さったが、目ぼしい資料は得られなかった。須賀川周辺の「おくのほそ道」に関連した史跡が説明付きの写真で展示されていたが、お昼時ということもあったせいか、人の子一人いない有様で、折角の企画もこの地の人たちにとってはどうなのであろうか。

職員の方に「おくのほそ道―芭蕉と須賀川―」という一枚刷のパンフをいただく。その中に「等躬は通称を伊左衛門といい、須賀川の駅長（諸色問屋）」といわれている。とあり、「可伸庵は等躬宅より、四・五軒南の裏通りに近

いとこにあり、其処に大きな栗の木があった。”ともあり、更に“二十四日は相楽等躬宅では田植えの日であった。江戸時代の商人は町で商いをしながら近くに田畑を持ち農耕をしていた。田植えも家人たちの手で行っていたのである。”とある。前記、等躬の職名、等躬邸の大きさ、田植行事などについての私見とは少々異にするところがあるけれども、私見を訂正するに至らない。可伸庵の所在を、等躬邸の四五軒南の裏通りというのは今の感覚、裏通りはそのとおりとして、当時の地方豪家の大きさを想定すれば、等躬邸の裏庭ぐらいに想定してよいなどという考え方からの話である。

博物館見学終って、再び須賀川駅に舞い戻った私どもは、駅前からバス（龍崎經由石川行の便、須賀川の隣村玉川村龍崎を經由して隣りの石川町石川に行くバス）で十数分、有名な須賀川の牡丹園は通過して乙字が滝で下車、何もない川のほとりに降ろされる。著名な滝らしいので、何か観光施設でもあるかと思つて昼食もせずに来たのに、そうしたものは全くないのに驚く。

ともあれ滝を見なくてはと、阿武隈川の左岸沿いの野道を下流に向つていくと、左手の岩かげに巨大な物体が鎮座します、卵型である。チャチな説明板を読むと、SF映画の円谷英二氏がこの地の出身らしく、それを記念してゴジラの里を須賀川に作り町興しの一助にしようという企画

の一つ、これはゴジラの卵のつもりらしい。極めて善意からの発案のようであるが、乙字が滝との取り合せが何とも珍妙で、しかも映画の張りボテ式の卵も滑稽、まずは興奮めと申すべきであります。そこを過ぎて少し進むと、発電用ダムの水の流れる取水口に簡単な橋があり、河岸に出られるようになってゐる。上流を見ると、川一面が岩盤で高低あり、それが滝の様相を示してはゐる。ずっと上流に国道の乙字大橋が見え、少し下流に赤い欄干の橋が滝の上に架っているのが見える。対岸は小さな公園になっているらしく、お堂も望見される。滝見不動尊というのがそれであろう。曾良の随行日記には、二十九日の条に、

○石河滝見ニ行。須か川々辰巳ノ方壱里半計有。滝ヲ十余丁下ヲ渡リ、上ヘ登ル。歩ニテ行バ滝ノ上渡レバ余程近由。阿武隈川也。川ハ百二十三十間も有之。滝ハ筋カヘ二百五六十間も可有。高サ二丈、壱丈五六尺、所ニ壱丈斗ノ所も有之。

と即物的に滝の有様を描写する。水量の少い時には、歩渡りもできたらしいのであるが、芭蕉主従は梅雨時で水量も多かったのか下流を舟渡しでもして、滝見のため十余町川上に歩いたようである。滝見不動のあたりから滝を望見したのもあつたろう。

芭蕉は、わざわざ滝見のために大廻りしているのに「おくのほそ道」で一行も触れていない。左程の感銘もなかつた。

たのであろう。大正時代には、この滝を利用して発電所を建設しており、この滝の左岸が取水口となり、数軒下流に発電所を設けているようである。当然のこと滝の水量は少なくなっており、芭蕉時代に比しても更に感銘少いものとなっているのだろうなと、滝の有様を望見して納得する。落差が少いので、日光山の滝々に比すると、滝という感じがしない、幅広さでナイヤガラナイアガラの超小型とでも申しましか。

田舎のこととてタクシーなし、バスの待ち時間が長いのでさと思案していると、赤い欄干の橋の旧道と新しい国道とをつなぐらしい川沿いの小道のところに小さな古い雑貨屋があり、軒先の縁側に小ぶりの冷蔵庫があつて、コーラなど清涼飲料水各種を売っている。声を掛けると高齢のお婆さんが顔を出して、皆百円ですよと言う、計算し易いようにしてあるらしい。立話をする、九十六歳ぐらいらしい。当地丸出しの純粹日本語で話して下さるので、よく判らないことが多い。千葉出身の綱脇君は共通するところがあつて、判り易いらしい、そのお話。

この小さなお店で一人住い、道をへだてた立派なお家に息子さんたちが住んでいる。お爺さんが亡くなった後もここで一人で頑張っている。この店は、前の橋が架つた時に移転させられてきた。地形（ジギョウ）が三銭だった（戦前の話にしてもひどく安い）、発電所ができる前は川水も

多く、乙の字形に滝が渦を巻いていた。昔は見物人も多くて、牛市（馬市と言われたか？）が立った時など大賑わいだった。今はめつたに滝見物に来る人はいないなどなど、途中で腰の曲つたお爺さんが煙草を買いに来て会話に参加、純粹言語だからますます判らなくなる。お爺さんは昔トラックの運転手で、奥さんの関係で本籍は宮島で、原爆にも遭つたとのこと、奇遇に驚く。原爆手帳をもらわれたらと助言しているところにバス到来、再びJR須賀川駅、駅前食堂で不味いざるそばかき込んで、電車に飛び乗る。白河に向う。

※ ※ ※

白河駅下車後、白河の関跡を再訪したのであるが、再記することもないので省略。小峰城周辺の探訪を記す。探訪と言ってもタクシー探訪とて不十分であるが止むを得ない。

JR白河駅前から西に向つて七八百米行くと旧奥州街道に突き当る。この街道を北に向つて更に五六百米行くと阿武隈川である。昨夏、マイクロバスで渡つた数軒下流の鹿島神社辺の川幅に比べて、両側の土手が迫っている感じで川幅が狭い。水量は時によるのであるけれど、少ない感じである。舟で渡るほどのことはない。歩いて渡れるというのが、今年始めてこの阿武隈川を見る学生阿君の感想である。私にもそう見えるが、大石田で濁流の最上川を見、

乙字が滝で下流の水量豊かな阿武隈川を見ている、その目の錯覚かも知れない。

ところで「渡る」の実態が何であつたかについて長口舌をふるつたが、ことは簡単であつた、板橋を渡つたのである。芭蕉が奥の細道行脚をした直後（元禄九年）にはほぼ同じ道を辿つた桃隣の記録は、「陸奥衛」五元禄十年八月素堂跋の巻五に収録されており、「おくのほそ道」の研究にはよく援用されるもの、その記録に

○阿武隈川は白河町の末、流れは奥の海へ落る。板橋百間余、半に馬除<sup>なはばうまよけ</sup>アリ。橋世ニ替りて見所有<sup>あり</sup>。

とあるのである。元禄九年と言へば、芭蕉が阿武隈川を渡つて七年後、その川渡りの方法に変化があるはずもなかった。

この「板橋」というのは、どのような橋なのであろうか。「日本国語大辞典」には、次のように見える。

○いたばし「板橋」○『名』板で作つてある橋。\*夫木、一六「谷の戸のあくるもふかき霧のうちに霜をわたせるまきのいたばし」へ藤原為家」\*易林本節用集「板橋イタハシ」\*俳諧・曾良俳諧書留「此秋も門（かど）の板橋崩れけり」へ重行」赦免にもれて独り見る月へ芭蕉」\*思出の記へ徳富虚花」五・七「一方は崖、一方は高い柱にもたしてしつらつた三畳位へ略」の小屋で、母屋との間には板橋がかかっている」○東京都北部の地名。―略―

右の挙例では、木の板で作つた簡単な橋ということは判るけれども、具体的な影像是浮んで来ない。角川版の「古語大辞典」には、

○いたばし「板橋」名○橋桁の上に板を並べて作つた橋。石橋や土橋などに対していう。「板橋イタハシ」「易林本節用集」「字塩井河原、板橋、長五尺、横二間半、是は自普請出来」「東海道宿村大概帳」

と見える。これはいくらか具体的記述であつて、単に板を架け並べただけのものではない橋を指すようでもある。「陸奥衛」の場合は、「百間余」とあるので、白河の奥州街道に横たわる阿武隈川の川幅だけある長い板橋である。橋脚をきちんと作つた橋ではなく、川中の石から石に板を継ぎ継ぎにしたものであつたろう。「半に馬除あり」というのであるから、人がやつと通行し合える程度の橋で、馬を通す時は狭くて「馬除」が必要であつたのであろう。大水が出た時には流れて了うか、撤去し得るといふ、恒久的というには程遠い橋であつたように思われる。

現に眼の前にある阿武隈川は、そうした橋を容易に架けられる表情、川幅は左程広くなく、川底の石が水面に露出している程度の水が、おだやかに流れているのである。今年の東北は、この時期に相当量の雨が降っているにもかかわらずである。もっとも今年の雨は、岩手・宮城・山形に多くて私どもの平泉から立石寺への旅を悩ましたのである。

が、福島南部では豪雨というほどのこともなかったようであるし、地図上で見るに上流に西郷ダムのようなダムも存在しているようで、昔日のごとき水量ではないかも知れないけれども。

こうした阿武隈川の様相を眺めながら振り返ると、大木の散在して緑の多い小峰城跡が見られる。河畔の平城という感じである。タクシーで奥州街道を少し逆行して右の小道に入っていくと、しばらくしてお堀端に出る。民家もあり工場もあるというところを抜けていくのであるが、荒地もある。昔はお城の周囲を立派なお堀がめぐらされていたようであるが、今は大半埋め立てられているのであろう。それでもお城のあった北の方、阿武隈川に面した方にも立派なお堀があつて、阿武隈川と合せて二重堀の様相を呈している。

大手門の大分手前に立入禁止の立札があり、石積の城壁の前で大工事が進行中、タクシーの運転手さんの話では、小峰城再建の話が日程に上っており、まず大手門から再建中という。大木を組み立てる工事が進行中で、拙速の鉄筋コンクリートによる再建ではなさそうである。天守閣再建がどうなるかは知らないが、木造再建は不可能としても、できるだけ昔日の悌を再現して欲しいものである。

「週刊朝日」の人気連載記事である司馬遼太郎氏の「街道をゆく―奥州白河・会津のみち―」（九月三十日号）を

見ると、小峰城を江戸初期に修築した丹羽長重のことが面白く書かれている。そこに描かれている長重の政治的位相から考えて、伊達政宗を中心とする奥羽軍団に対する、徳川政権維持のための防御的城塞として築造したことは間違いないことである。大手門も阿武隈川の方に向いており、お城全体が阿武隈川方向に向いていて、阿武隈川は外堀の役目を荷っていたとしてよさそうである。とすれば、幕初において阿武隈川に架橋するはずもなかったであらうし、元禄の時代になって交通の便を優先するようになっていたとしても、恒久的架橋をすることはなかったと思われる。それが「板橋」になったと言えるようである。

芭蕉は、「あぶくま川<sup>かは</sup>を渡る」ときに、この「板橋百間余」を渡って、須賀川の宿を目指したのであった。

※ ※ ※

須賀川から白河への馳足的行脚の行程は、新白河ホテルに一泊することで終る。疲れは足腰に蓄積されているが、昨年不十分と思われた部分を補完したことである。これで付記のペンを置く。

注一 拙稿「日光御成街道道中記随感―「奥の細道」の「日光」と

「白河」とをめぐって」（『文教国文学』第三号）参照。

注二 須賀川市発行のパンフに「芭蕉たちは可伸庵からの帰りに近くのお寺と八幡さまを参拝した。可伸庵から数軒ほど南に徳善

院があり、可伸庵の西裏には岩瀬寺と八幡神社があった。徳善院も岩瀬寺も明治の初めに廃寺となり、八幡神社は神炊館神社（諏訪明神）に合祀されている。この八幡神社名残りが「八幡町」「八幡山」の町名となっている。と見える。